

「子母澤寛文学賞」【佳作】

「憂ターン」 京都府 田崎つゆ子

何とみすばらしい夢を見るものだろう。喉がひりひりと渴き不快だ。

この数年で五、六回、同じ場面同じ設定で朝方に限って見る。朝見た夢は尾を引く。

僕が小川に沿った小道を歩いていると硬貨が幾つも落ちている。次々と硬貨を拾って進むと、不器用に折りたたまれた紙幣も落ちている。紙幣はもちろん、硬貨も泥で汚れているがそんなことは構わない。僕は嬉しさに胸を躍らせながらどんどん小道を辿って……いつも夢はそこまで。その先はない。

言いようのない卑小感が起床後もしばらく続く。誰にも話したことはない。

僕の生家は小川の近くにある。石川県の山村であるが、白山の伏流水に恵まれた豊かな土地である。その小川の橋を渡って、僕は名古屋から故郷へUターンした。

思えば十八歳で名古屋の大学へ行くために、一人でこの橋を渡って駅に向かったのだ。三月の早朝、先が見えないほど川霧が湧いていた。駅まで見送りたいという母と橋の袂で別れた。向う岸から振り返ると、濃霧が橋の袂の母をただ丸く象っていた。

あれから四十年以上、年に一度は帰省したがいつも駆け足で一泊がせいぜいだった。定年を前にこんな形でひとり、ここに戻って来るなどとは思ってもしなかった。

父が七十四歳で死んだとき、母はまだ六十五歳だった。脳梗塞で片麻痺が残った父のため、教員だった母が早期退職し、五年間介護し看取った。父の死後、思ったよりもさっぱりと独り暮らしを望んだ。頑固で手のかかる父がいなくなり、思いがけず手にした初めての自由だったろう。母は、それを手探りで楽しみ始めたように見えた。

その頃、僕は四十歳で製薬会社の研究員として勢いがついてきたところだった。抗生物質を見つけて病人に光を与えたのも束の間、やがて耐性菌という化け物を産んでしまい、再びこれに抗するものを作らんと日々研究を重ねていた。当時、結婚して五年目の妻は家庭的で、三歳の娘はかわいい盛りだった。

父の死から二十年経ち、母は八十歳をとうに超えた。最近の電話では同じ事ばかり話すようになり、妻が少し気にしていた。そこへ故郷のおじさんから連絡があった。

「義妹が何か変だ。ごみ出しに来なくなった。食事もどうしているのやら」

すぐには帰れない。母の亡き姉の夫であるおじさんに、しばらくの見回りを頼んだ。

僕は年内に定年を迎えるのだが、老齢年金が支給されるまでの数年間を、一研究員として会社に残ることになっていた。開発部に残るといふ話は願ってもないことだった。好きな仕事が続けられるのだし、収入は減るが管理職務は免れる。まだまだ究めたい事、できる事があって、恵まれた研究施設での仕事は、きっと僕のライフワークになるだろう。

妻は子育てを終えてから、趣味の染色を始め、十年もすると講師の資格を取った。そして、布を染めて布花を作る教室を開いた。折しも、娘が大学の寮に入ることになり、空き部屋を改築、工房を兼ねた教室にした。妻は、念願の工房を持つことができ夢のようだと喜んだ。四年前のことである。ささやかながらも、二十人ほどの生徒さんがいて教室は順調だった。夢が叶って張り切る妻に、母の世話をしに帰省させるわけにはいかないだろう。

翌朝、電話がかかり、応じた妻が顔色を変えて手招きした。朝、母を訪ねたがないと言う。探したが見つからない、搜索願を出そうか、とおじさんの心配そうな声だった。

外に出て家に戻れなくなった母が、駐在所に保護されていたという連絡は、それから二十分後のことである。昨日の夕方、川縁の道を遡り、方向が分からなくなったようだ、と駐在所から直に電話があった。母は住所を思い出せず、夜だったので保護したとのこと。

帰る支度中だった僕は、ほっとすると同時に無性に腹立たしい気分になり、おろおろ心配する妻に、少し荒い言葉を投げてしまった。

車で五時間の道程は遠い。予定にはない、しかも、自分の能力以上の仕事を頼まれた時のような重い気分で車を走らせた。

生家では、おじさんと、役場の保護師とケアマネージャーが待っていた。母は駐在所のベッドでは眠れなかったらしく、帰宅してから眠りこけていた。

母の生活が昼夜逆転しているかもしれないと保健師は言う。最近、昼間見かけなくなったとか、早朝、泥だらけの母を見た人がいるとか、買い物に来なくなったとか、また、昨夜は川縁の蛍を見に行ったと言うが、季節的に蛍がいるわけではないので幻覚があるかもしれないとか、短時間でよくまあ、これだけの情報を収集したもんだと思う。

やがて、母が起きてきてぼんやりと僕を見ている。僕は切なくて胸が塞がる思いだった。

そして、決心せざるを得なかった。退職して僕が母の世話をしなければならぬ。いつか、こんな日が来ることは分かっていた筈じゃないか。ただ、そうあって欲しくなかったので、分らぬふうを装っていたのだ。

母は夢の中の蛍を追って川上へと歩いて行ったのだろう。僕が汚れた小銭を拾いながら川縁を辿った、あの夢のように。

僕が母の世話をするという決心は、高齢のおじさんや他の人たちを安心させたようで、それならばと、とんとんと話が進められた。

母は介護保険を前倒しで利用し、僕が戻るまで施設に短期入所することとなった。

会社に状況を説明し退職願を出した。残務整理をしつつ無念で叫びたい衝動にかられ、それをかき消そうと書類を裁断機に入れ続けた。パソコンの方は係員に任せ、僕は、僕の会議メモや、会社に残留するとして必要な参考書類や、資料のコピーなどを始末した。

それらが全て裁断され幾筋もの灰色の紙紐になった時、ようやく、ちゃんと諦めることができた。仕事が全てだったかのような喪失感の中で、名刺を切り刻み荷物をまとめた。

呼ばれて振り向くと、開発部だけではなく、他部門の人たちも僕を送ろうと集まってくれていた。困難な仕事を抱え共に悩んだ同僚や部下、かつての懐かしいライバルもいて、口々に慰労の言葉をかけてくれた。大きな花束も用意されていた。そして、急な事態で迷惑をかけるだろうと辞退したが、結局、盛大な送別会をもらった。

母が短期入所している間の十日間に、慌ただしく仕事にけりをつけ家を出た。済まなさそうに言い訳する妻に、一緒に来てくれというつもりは毛頭なかった。

母は短期入所する前に介護保険調査を受けた。また、医師の意見書が必要とのことで、近くの診療所で診察してもらった。病名は老人性認知症だという。いざ診察されてみるとショックだった。症状は、よく理解できる時とできない時がまだら状に出ると説明された。

そして、僕は八月下旬の猛暑日に生家に戻ってきた。橋を渡って停車し堤防道から生家を見下ろすと、築百年の家の大屋根小屋根が、夏草の中にすっぽりと埋もれている。周辺は休耕や放置の田畑が広がり、家の近くに二軒、幼馴染が住んでいた家がある。長年の空き家でそこも夏草が繁茂し無残な廃屋になっていた。これからの母との生活は何ひとつとしてイメージできなかったが、わが家の周囲のあの夏草は刈ってやらねばならないと思った。

翌朝、ケアマネージャーが訪れ、週三回のデイサービスというケアプランが示された。

あとは僕の介護負担がどうか、つまり介護能力次第でサービスを見直すと言う。そして、介護保険の制度や各サービス、事業者の理念まで説明された。同意して契約したが何とエネルギーの要ることか。ひどく疲労した。

母は初めての施設泊まりで落ち着かず、何度も帰ると言って困らせたらしい。送ってくれた施設職員に礼を述べる僕を、母は無表情に見ているだけで何も言わない。たまりかねて帰ってきたよと僕から声をかけた。

「仕事はお休みとれたの」

と普通に答えるのでひとまず安心した。

「仕事は辞めたんだ」

「なんで」

「定年なんだ」

「そう、それはおめでとう」

翌朝、母と僕は「お休みとれたの」から始まって「そう、おめでとう」まで全く同じ言葉で一連の会話を交わした。他人なら笑いたくなるところだが、僕は暗澹とした気持ちにさせられた。

そして、この日一日母を観ていて、これは大変なことになったと思った。母は着替えや歯磨き、トイレなど、決まりきった日常の身の回りのことは出来る。だが、調理や掃除、洗濯などの家事がひとりではまともに出来なくなっていた。傍についていて指示すればそれなりに行うが、指示がないと次の動作を忘れ、あれこれ迷って進行しないのだ。

村に一軒しかないスーパーへ買い物に連れて行くと、出会う人への挨拶はできる。並んでいる品物を籠に入れ、まどろっこしいが支払も出来る。ただ、毎回、大きいお札で払っているのだろう、バッグには小銭が重いほど入っている。帰りに店の出口が分からず迷っている。僕が教えると「ああ」と笑う。

母は几帳面で綺麗好きだったが、今は家中、どこもここも散らかっていて汚れが目立つ。これが認知症というものなのか。暗い湿った隧道に迷い込んだような心細さで、なかなか寝つかれなかった。

母はこの二晩、夜中のトイレに起きても外へ出ることはなかったし、よく眠れているようだった。次の朝、デイサービスの送迎車が来た。介護職員が母の手を取り、体操したり温泉に浸かったりしようと、上手に誘ってくれた。母はげん顔をみせつつも乗車した。

広い家にひとりになって知らず知らずのため息が出た。そして、今度は意識して大きなため息をついてみた。それから、まず掃除機を探し出して掃除をした。掃除機を動かすとかびの匂いがした。四部屋をひとつに開け放つことができる田の字形広間は、出入りした形跡も

ない。母は台所の隣の一部屋しか使ってなかった。広間の縁側の雨戸はいつから閉まったままなのだろう。雨戸を引くと重くギシギシと擦れる音がした。他の部屋の窓や、裏戸も開け放ち涼風を迎える。

意外にも庭は手入れが行き届いている。きっと、定期的に庭師が入っているのだろう。北側の小さい築山、その中ほどから滝を表す石組みがある。石組みは川となり東南の洲へと続く枯山水風の、亡父が自慢していた庭である。大きくなった常緑樹が西日を遮っていて。広縁に転がってみると風が心地よい。子供の頃、この広縁で西瓜を食べ花火もした。あの頃は周囲に子供がたくさんいた。今は子供の声はおろか、人の声もしない。ただ、ザンザカザンザカ蝉が鳴くばかりだ。

僕には四つ違いの兄がいたが、三歳の夏、流行りの病気で亡くなった。八月の命日を済ませると、母は決まって兄の話をした。母は三歳の兄を実家に預けて働いていた。だから、母子の時間というものは限られていて、兄の思い出も限られていたのだろう。いつも同じ事ばかり語るの、兄の思い出はそれしかないのかと思ったことがある。

赤ちゃんの兄が這わないので心配していたところ、この広縁で急に立って歩き始めたというのだ。「驚いたねえ」と父に同意を求め、時には涙ぐみながら語った。母は今もこの思い出を胸にしまっているのだろうか。

僕は結婚するまで賄いつきの寮にいた。家事は一通り出来る。母が週に三回デイサービスを受けている間、実によく働いた。背戸や表周りの夏草を刈り、シンクを磨き、布団を干し、汚れ物かどうか、見分けがつかない衣類の塊を片っ端から崩して洗濯した。

多量の汗をかきながら、こうしてクルクルと働いていなければならなかった。そうしないと、家族のことや、これからの母との生活など、不安が不安を呼びおこし、心の中にとどまりそうで怖かった。立ち止まってはいけない、今は僕がしなければならぬ目の前を、何も考えずにしゃにむにやろう。それを胸に言い聞かせる。

母はデイサービスから戻ると「ああ、疲れた」と何もせず夜はよく眠った。そこでは、昔からの知人や教え子の父兄たちがいて「先生、先生」と呼んでくれるらしい。連絡帳には、とても機嫌よく過ごしていると記入してあった。デイサービスの無い曜日は、買い物に連れだしたり近くを散歩したりした。できるだけ母を無為に過ごさせないほうが良いと、介護職員から助言されていた。

こうして一か月くらい経ったある日、母が「あんた、そろそろ家に帰ったら」と言う。

「帰らなくていいんだよ」

「もしかして、あんた離婚されたの」

「違うよ」

「それじゃ春子さんが心配しているでしょ」

「大丈夫。祭りには春子も来るってよ」

「そう、それならよかった」

母の病気の症状はまだらだと医師から聞いてはいたが、すごくクリアな時がある。そういえば、前に比べぼんやりとしていることが少なくなった。良くなっているとは言えないが、母の脳内の母親らしい記憶は衰えず残っているようだ。しかし、家事の方は相変わらずで、

洗濯物は脱水する前に取り出そうとするし、冷蔵庫から肉を出して放置したりするので目が離せない。母につきっきりで家事をさせるのは大変で、ほとんど僕がしている。

十月も半ばを過ぎた。日中は暑い日もあるが、朝晩は涼しくなり、少しずつ短日になっていくのが肌で感じられる。今までになく季節の移ろいが身に沁みる。

この頃の母は、良くなりもせず悪くなりもせず、現状のまま落ち着いている。僕もこの生活に慣れてきた。そうすると、始めのしゃにむに走ってきた気持ちが薄らいでくる。これまでは理屈も何もなく、やらなければならないと、それだけでただ走ってきた。今、生活リズムが一定してきて、時間的にも余裕ができ、嫌でも自分の身の上を思わずにはいられなくなった。会社を辞めたら、ぜひやってみたいと考えていた事が幾つかあった。あれもしよう、これもしよう、僕の人生はまだまだこれからだと思ったのは、わずか十か月前の正月だった。僕はいったい何をしているのだろう。このまま、母と共にこの川縁の家で老いてゆくのだろうか。

縁側に座っている母の円い背に、秋の陽が射しているのも物悲しく見える。母との暮らしは口数少なく二言三言で用足りた。他人と会話する機会はほとんどなく、美しい派手な秋の夕陽を前に、今日も一日、誰とも話さなかったなと思う。こんな生活がいつまで続くのだろうかなどと、暗い気分が続べられている時、家のだっ広さにも気が滅入ってしまうのである。今まで感じたことのない気持である。かなり汚れ渋が入ってしまった桐の筆筥、一枚檜の座卓、中二階に上がる階段筆筥、馬鹿でかい水屋や下駄箱、どれも昔からそこに在りどっかりと居座っている。

僕の部屋だった二階は、埃だらけの机や本棚が、以前の場所にそのままある。部屋の空気は沈み切っていて、あの頃から、少しも入れ替わってないような気がする。

何十年も経ったというのに、空気さえ変わっていない空間は不気味だ。僕がここを出てからの四十二年間は、いかにもちっぽけで、もうすでに無かったことになっていやしないか。あれらは全て幻想でここにずっと僕はいたのかもしれない。不変の空間は、恐ろしく非現実的な想いを招き寄せた。僕は今、尋常ではなくなっている。

そして、ここへ来てから、本当に心から笑ったことが無いとふと思った。TVのお笑い番組を見て笑ったりするのだが、本当には笑っていないのだ。もしかしたら、介護負担とは、こういうことを指すのではないか。母の世話や家事に明け暮れることだけが介護負担ではなくて、重く冷たい得体のしれない物体を腹に抱えているようで、腹の底から笑うことができないのだ。もし笑えたとしても、眉間に皺を寄せた嫌味な笑顔しか作れないだろう。この状態こそが、介護するものの真の辛さなのではないか。

秋祭りが近づいてきた。春子がこちらへ来る予定だったが、文化祭の準備が遅れていて行けなくなったと連絡があった。毎年、生徒さん達と共同の大作を出展してきたのは知っている。何だか気落ちした僕は、遊ぶ約束が取り止めになった子供のようなもんだと、自らを例えてみて苦笑いした。

祭りの宵に母を連れて神社へ行った。五分も経たず、母は太鼓の音で耳鳴りがすると言い出した。人もまばらで、神社に昔の賑わいはなく、太鼓ばかりが響いていた。帰宅途中、僕が知っている人には誰とも逢わず、ただの顔見知りの人さえいなかった。もしかしたら、昔

の友人たちの誰かに逢えるかもしれないと、ほんの少しだけ期待していたのだった。

十八歳で村を離れてから、友人とはせいぜい賀状交換くらいの付き合いで、それさえ途切れ途切れの繋がりだった。故郷を忘れたかのように、友情を温めることもなく都会生活を享受してきた。今さら、友人に出逢っても互いに判らないだろう。

家に帰ると、隣組の班長さんが回覧板を持ってきてくれた。僕が言葉を交わす数少ない人間、班長さんはその一人である。母は見事に普通に対応している。一見、とても認知症老人とは思えないだろう。母が他人にうまく対応できるのは喜ぶべきことに違いない。でも、それはそれで、僕の苦痛は誰にも理解されないだろうと思う。こんな時に兄弟がいたら、遠慮なく愚痴を言い合うこともできるだろうに。一人子はずくづく寂しい。

母は思考力が衰えちょっと込み入った話だと避けてしまう。あるいは適当に相槌を打ったあげく、辻褃合わせの話を作るか笑ってごまかす。だから、簡易で子供に話すような限られた言葉だけで通す。これが毎日だ。経験してみないと解らない類の苦痛である。

もともと僕は屈託のない男だと自分でも思う。子供時分から苦労はしてないし、そこそこの大学に入り、会社で研究するだけの能力は授かった。そして、誠実で影の無い明るい人だと評価されてきたのである。それがどうだ。今は自分の影の中に自分を閉じ込めて、溺れそうになり足掻いている。

十日ほど前から背中に違和感があり、それがいやな重みになった。その内、その重みがだんだん疼きに変わり熟睡できなくなった。

月に一度はケアマネージャーがケアプランと現況の確認をして、同意を得るためにやってくる。モニタリングと称している。きっと、僕がうっとうしそうな表情をしていたのだろう。彼女は見逃さない。

「お疲れはないですか。大丈夫ですか」

僕が大丈夫ではないと言ったらどうしてくれるのだろう。曖昧な返事をする。

「大変ですね。介護負担の軽減のためにヘルパーさんを頼みますか」僕は黙っている。

「ヘルパーサービスを使って少し休まれたら」

そんなことじゃないんだ。それで背中の重み、痛みがとれるのか。僕の気持ちを理解しているようなふりをするな。若い君に何が解るといふのだ。僕は世話になっているケアマネージャーに心の中で毒づいた。

十一月、川岸に冷たい風が立ち、紅葉した風草や茅が一方にそよいでいる。晴れたかと思うと直ぐに時雨れて、そのあとはよく冷えた。山々の紅葉の季節は短く流れ、堤防の山桜や银杏もすっかり葉を落とした。その裸木の色の無さがいよいよ侘しさを募らせる。

ひとりの昼食を準備したが全く食欲がなくいやいや食べる。ひとりで食事をする孤食の辛さも僕を苦しめた。母は長い年月ひとりで食べてきたのに、僕は半年もせずその苦しみに喘いでいる。薄暗い居間に僕が嚙むたくあんの音だけがしている。たくあんの音は僕の顎から骨に伝導して脳天からも聞こえる。

もうだめだ。これはいけない。僕は病氣らしい。ここのところ、やたら怒りっぽくなったり、些細なことに落ち込んだりする。

昨夜もそうだった。鳥鍋を作って母に具を取り分けてやったまでは良かった。こんなに食

べられないわと母が食べ残した。それはよくあることだった。それなのに僕はなぜか腹を立てて、残飯を荒々しくごみ箱に捨てた。

また、母がここまで長生きするとは思わなかったとたまたま愚痴をこぼす。それを聞き流すのも嫌になり、不機嫌な言葉で遮ってしまう。僕の顔色を見て母は早々と寝間に逃げる。

木枯らしの吹く夜、心の閉塞感に耐えられず、用もないのに車を走らせた。このまま運転を誤って崖に転落したらどうなる。人は何と云うだろう。あの人この人の顔を思いながら、そんなことを思う自分にまた嫌気がさす。

今の僕の状態こそ抑鬱状態というのではないだろうか。会社で抑鬱剤や精神安定剤の開発にも携わったが、あの頃は、その薬を飲まなければならない人の気持ちまでは解らなかった。新薬で苦しみから解放してあげたいとは思ったが、その苦しみがどれほどのものか、何も知らずにいた。つまり、僕は薬を世に出すだけのことで、それを使う人間の心は考えなくてもよかったのだ。

ケアマネージャーに連絡して、二、三日施設で母を預かってもらいたいと頼んだ。母にも急用ができたからと伝え、久しぶりに名古屋の自宅に戻った。

急に戻った僕を見て、妻は驚いたが何も聞かなかった。

「冬服を取りに来た」

冬服は、近いうちに妻が届けようとしたらしく、旅行鞆に詰めてあった。

入浴し妻の手料理を食べて、リビングのいつもの場所に座ると、どっと疲労感に襲われた。早めにベッドに入り、翌朝九時までの約十二時間ぐっすり眠った。よく眠って気分が晴れ朝食がうまかった。そのあとで、妻が言い難そうに言う。

「十一時に講習会の約束があるのだけど」

「急に来たんだ。気にせず行っておいで」

僕の昼食などを用意して、それでも気にしながら妻は出かけた。僕は住み慣れた自宅で張り詰めた心が溶けるような気がした。でも、なぜか以前と同じようにはくつろげない。

次の日は教室があって妻は忙しい筈だが、あれこれ僕に気を遣っている。

若い頃、退職した上司が近くまで来たので寄ったと、職場に来たことを思い出した。僕らは元上司に、軽くあしらわれたと思われぬよう気を遣った。それぞれ、その日の予定に気を揉みつつ接したものだ。今、そんなことを思い出してしまう自分が情けない。

僕は冬服などを車に積んで、午後には家を出た。また五時間の道程を走り生家に戻った。

どちらの家に居ても、ふかふかの新しい座布団に座っているような、馴染まない居心地の悪さを感じてしまう。そんな自分の卑屈ともいえる繊細さを憎んだ。

僕はこんな難しい男ではなかった筈だ。社会にというか、人間にというか、厚い遮蔽を感じる。親の介護というものは、人間の性格傾向や度量までも変えてしまうのだろうか。

だんだん寒くなって、炬燵を置くと母は動くのを厭うようになった。これではいけないと思立ち、天気の良い日、母を散歩に連れ出した。少し川風が吹いていたけれど川縁を歩いた。あの嫌な夢を思い出すことがあるので、あまり川縁の散歩は好まない。そういえば、こちらに来てからあの夢は見えない。

川幅はそれほど広くはないが、天井川なのでよく氾濫し、戦後、しばらくして堤防が築か

れたそうだ。堤防には車が一台通れるくらいの道があり、片側に樹木が植わっている。

その道を遡ると小川が合流していて、軽やかなリズムの瀬音がする。小川に沿った小道が緩く曲がって続き、少し先に土橋が見える。

この小道はどこまで続いているのだろう。

「あれっ」僕は立ち止まる。ここだ。僕の夢に出てくるのはこの小川の小道だ。

「ここはよく一緒に来たねえ」と母が呟く。

僕はここが母の実家への近道だということを思い出した。

そうだった。幼い僕はここで母と踏を採ったり蝶々を追ったりした。蛍の乱舞もここで見た。父と流れに入りメダカを掬った。その時の素足に水の感触までも思い出した。小道に佇む僕の脳裏に、次々と父母との歳月が蘇ってきた。大切に仕舞って置いた宝物が、いっぱいになって溢れてきたようだった。

そこには、汚れた小銭を拾って歩くみすぼらしい僕はいなかった。父はよく働き、母はよく笑い、僕は誰よりも幸福な子供だった。

秋は足早に去った。そして、十二月の中旬には雪がちらついた。濁った青みが混じる灰色の空から、柔らかで美しい真っ白の雪が、漂うに落ちてくる。

母の城だった台所は、床から寒気が上がり芯から冷える。浴室はさらに寒く、隙間風が音を立てて擦りガラスを揺さぶる。少し改築したいが、母は先祖が建てた家だからとか、何やかや言って賛成しない。

正月は妻が宅急便で送ってくれた重箱のおせち料理を食べ、何もせずに過ごした。

一月半ばを過ぎてから大寒波が襲ってきて、大雪警報が広範囲に出された。夕方から降り始めた雪がそのまま止まずに夜になった。風のない静かな静かな夜だった。その夜が明けると、玄関の戸が開かないほど雪が積っていた。積雪七十センチメートル、TVで十年ぶりの大雪だと騒いでいる。近年、積雪量が減って、昔のように大掛かりな雪囲いをする家は少ないようだ。僕の家は全くといっていいくらい冬構えをしていなかった。

十時には除雪車が来て、家の前の車道は開けられた。しかし、玄関から敷石を通過して門までの十五メートルはスコップで除雪しなければならない。また、窓や勝手口が雪で壊れる恐れがあり、家屋周りの除雪もしなければならない。その間にも雪は降り止まず、僕は薄暗くなるまで除雪作業をした。湿度が高いから不思議と寒くない。

次の日も次の日も雪は降ったり止んだりし、夜、寝室の窓から外を見ると、街燈の円錐状の灯りが、絶え間なく降る雪を白く照らしていた。このまま降り続くとしたら、屋根の雪掻きをしなければならないだろうと心配になった。僕は雪掻きをしたことがない。昔は雪掻きを助け合うべく順番が、村の規則としてあったらしい。病人、老人、寡婦の家からと聞いたことがある。今では高齢世帯と独居世帯が多く、隣組という組織は残っているものの、昔のような密なコミュニティは成り立たないだろう。僕のところの隣組も世帯数は十軒に満たない。母は僕がいるからかどうか分からないが、何の心配もせず穏やかによく寝ている。それはひとつの救いでもある。

ありがたいことに、夜間の降雪は予報に反して少なかった。それでも、雪は新たに十五センチほど積った。僕は買い物に出られるように、車庫前を昼までかかって除雪した。午後、



雪は止んだが、今度はひどい寒風で、買い物に出る気も失せてしまうほどだった。

表でシャクシャク、雪を踏む音がした。

「おーい、大丈夫かい」

「俺だよ、俺、分らんか」

玄関にスコップを持った男が二人、マスクを外して笑っている。

「あれ、山中君かい」

「覚えていたか。こっちは竹田。祭りの時に君が戻っているって聞いてさ、すぐにも来たかったんだけど、法事やらいろいろでさ」

「えらい雪で難儀してんじゃないかって」

そして、ホイと渡されたダンボール箱には、肉と豆腐と野菜が無雑作に詰め込まれていた。

高校卒業以来の再会である。山中君は農業を継ぎ、竹田君は郵便局勤務だという。もうすぐ定年なので、そうしたら釣りに行こうよと楽しそうだ。お互いに年を取って髪が少なくなったが、それでも案外、笑顔や喋り方で誰か分かるもんだなあと三人で笑い合った。

屋根の雪搔きは心配するな、今度はしし肉と酒を持ってくるわと大声で言いながら、二人は軽トラで帰っていった。

日本海側は大雪だとニュースが流れ、妻はとても気にしていた。

「私、考えたんだけど。お義母さんが名古屋に来てくれたらと。ええ、一緒にお世話させてください。雪が降ったりして心配だし」

僕は素直に「ありがとう」と答えた。

除雪車が通ったあと、道の両側に除かれた雪が壁になって立つ。家の前にも固い雪が積まれて壁を作っている。重なり固まった雪は重い。それを切り崩して取り除くのも一苦労だ。僕は腕や腰に湿布薬を貼って作業した。届かない背中が母が貼ってくれた。

夜はすぐに寝つき、何やかやと悩んでいる暇はなかった。除雪が先決問題だった。

朝、娘から卒後の進路を相談するメールを受け取った。一人娘でも、僕たち親のことは心配しなくていい、自分の信じた道に進むよう返信した。思えば、父も母も一人息子の僕をこの家から送り出してくれたんだと、今さらながら思った。

母は、この地を離れたくないと答えながら、僕の顔色を窺っているように見える。

「そろそろ、老人ホームに入ろうかねえ」

「まだ早いだろよ」

その後も何度か寒波に襲われ厳しい冬だったが、ひどい雪はもう降らなかった。

雪はみぞれ混じりになり、それから雨になり、やがて雪の下から青い草が覗くだろう。